

## 浜松の戦争遺跡

竹内康人

この公開講座の第一回では、荒川先生が浜松と軍隊の歴史についてお話しになったと思います。第二回では、村瀬先生が浜松の空襲の話を防空監視哨の資料を使いながら細かく話されたと思います。

第三回となる今回は「浜松の戦争遺跡」というテーマですが、第一回で軍隊、第二回で空襲の話をしたということは、浜松の戦争遺跡を考える意味で、主要な視点が二つ出されたことになります。

というのは、浜松の戦争遺跡は大きく二つに分けられるからです。一つは軍事施設の遺跡、もう一つは空襲関係の遺跡です。そして、その二つの死者を追悼する形で、さまざまな碑も残っています。

ここでは、これまでの話をふまえて、「浜松の戦争遺跡」というテーマで話をしたいと思います。最初に、「戦争遺跡

とは何か」という全般的な話をし、浜松の歴史と戦争遺跡の具体的な状況を紹介し、日本や世界でどのように戦争が語り伝えられているのか、戦争遺跡の意義とは何か、の順に話したいと思います。

### 戦争遺跡の定義

まず、戦争遺跡をどのように定義するのかについてみてみます。何をもって「戦争遺跡」というのかですが、戦争遺跡保存全国ネットワークという団体は、「近代日本の侵略戦争と、その遂行過程で、戦闘や事件の加害・被害・反戦抵抗にかかわって、国内外で形成された、かつ現在残された構造物や遺構や跡地」と定義しています。

ここでいう戦争遺跡は「近代日本」のものを指しています。

たとえば、武田信玄と徳川家康が戦った三方原も戦争遺跡ではないかといわれる方もいるかもしれませんが、ここでは、近代日本の戦争に絞って考えているわけです。

では、戦争遺跡にはどのような種類があるのでしょうか。『しらべる戦争遺跡の事典』という本では次のようにまとめています。

政治・行政関係…陸軍省、師団司令部、陸軍病院、陸軍学校、研究所等  
軍事・防衛関係…要塞、陣地、飛行場、演習場、通信所、退避壕、掩体壕等  
生産関係…軍需工場等  
戦闘地・戦場関係…空襲被災地、原爆被爆地、その他戦闘が行われた地域等  
居住地関係…捕虜収容所、外国人強制連行労働者居住地、防空壕等  
埋葬関係…陸海軍墓地、捕虜墓地、忠魂碑  
交通関係…軍用鉄道・軌道、軍用道路  
その他…慰安所、奉安殿、学童疎開所

また、「戦争遺物」という概念もあります。戦争遺跡の発掘調査では、たとえば兵器類、軍用品、日用品、建築資材、

工具、電気器具など、いろいろなものが出土しますから、それらを「戦争遺物」として位置づけます。

#### ↑戦争遺跡を知るための資料

戦争遺跡を知るための資料としてよく使われるのは、陸海軍の文書です。これは防衛省の図書館、防衛研究所にあります。

また、アメリカ戦略爆撃調査団の資料があります。この調査団は英文で United States Strategic Bombing Survey といい、これを略して USSBS といいます。現物はアメリカの国立公文書館にあります。主なものは国立国会図書館にもあります。ピースおおさか(大阪国際平和センター)にも米軍関係資料があります。

『静岡県史』や『浜松市史』のような自治体史も参考になります。また、地図や空中写真、さらには聞き取りや証言なども、戦争遺跡の調査では重要な資料になります。

#### 戦争の歴史と浜松

##### ↑陸軍歩兵基地から陸軍航空基地へ

浜松には一九〇七年に陸軍の歩兵第六七連隊が置かれていたのですが、一九二〇年代の軍事の近代化のなかで、陸

軍の飛行機の部隊が置かれます。陸軍の飛行第七連隊が一九二六年に東京の立川から飛来したわけです。会場の静岡大学浜松キャンパスがある場所には高射砲部隊が置かれました。

この飛行第七連隊から、戦争のたびに次々と中国大陆に派兵されます。派兵先でさらに増強し、中国各地で爆撃をくりかえすわけです。派兵された部隊の名前は、最初は飛行第七大隊第三中隊であったのですが、それが大きくなつて第十二大隊、さらに第十二連隊になり、日中戦争になると、第十二戦隊へと名前が変わります。この第十二戦隊から、さらに多くの部隊が編成されていくわけです。つまり、浜松を出発点にして中国大陆に行き、中国大陆で増強されて、そこから次々に増殖して部隊が生まれて行くのです。

浜松からの部隊は台湾にも、中国の「満州」にも行きます。「満州」に行った部隊が、中国北部から中国全体に行動範囲を広げ、そしてアジア太平洋戦争が始まると、シンガポール、マレーシア、インドネシアにも派兵されるという形で、爆撃部隊は行動し、部隊を増殖させていくわけです。このような爆撃部隊の起点になっているのが、浜松なのです。

#### 十軍都浜松

浜松は、爆撃の拠点となっていただけでなく、プロペラ

やエンジンを生産する軍需工場を中心に多くの工場があり、軍需生産の地でした。日本楽器では飛行機のプロペラを作り、中島飛行機ではエンジンを製造しました。さらに、飛行機関連のさまざまな部品を、浜松の小さな軍需工場がたくさん作っていました。鈴木織機では砲弾などを作っていました。

もともとは平和的なものを作っていた工場が、一九三〇年代後半から、徐々に軍需工場へと再編されています。

浜松陸軍飛行学校では毒ガス戦の研究も行われていました。戦後すぐに浜名湖に毒ガス缶を捨てて隠しています。その後、毒ガス缶が浮かんできて、触れて亡くなった方もいます。最近でも、浜名湖周辺の山林で毒ガスの缶が見つかっています。

毒ガスで最も重要視されたのはイペリットです。このガスは吸引すると、血を吐いて苦しみながら死んでいくという糜烂性のものです。そのイペリットをどのように飛行機で使うのかという研究をしていました。イペリットとルイサイトというガスを混合することもありました。

これを飛行機から爆弾で落としたり、空から撒いたりします。雨のように撒くので、「雨下」といいます。浜松では爆撃機による毒ガスの投下と雨下の訓練をしていたのです。この毒ガスを日本軍は実際に中国大陆で使用しています。

しかしその実態は今も明らかにになっていません。なぜかというところ、毒ガスを使うことは戦争犯罪だからです。もちろん、そもそも戦争そのものが戦争犯罪であるという考え方もできますが、ここでは、たとえば捕虜を殺す、一般住民を殺す、毒ガス兵器や細菌兵器を使うなどといった、戦争中でもやってはいけない行為を指します。その戦争犯罪を中国大陸で行っていますから、その実態は今も隠されたままということなのです。

一九四四年には、浜松の三方原を拠点にして、三方原教導飛行団という毒ガス戦用の独自部隊も編成されました。

話をまとめますと、浜松は陸軍の歩兵連隊から陸軍の爆撃の拠点になり、高射砲部隊が置かれ、さらに毒ガスの航空戦部隊も置かれたということです。戦争末期には、特攻戦部隊が編成され、各地に本土決戦の部隊も置かれました。そして戦後は、航空自衛隊浜松基地になる。浜松にはこのような軍事の歴史があるわけです。

#### ↑基地建設での朝鮮人労働

図1は航空自衛隊浜松基地の弾薬庫の写真です。この浜松基地には、戦争遺跡がいくつか残っています。飛行学校時代の部隊の建物や弾薬庫、衛兵の詰所もあります。戦争末期に建てられた地下戦闘指揮所の建物も残っています。

この浜松基地の前身となった陸軍飛行第七連隊の飛行場建設にあたっては、朝鮮半島から渡ってきた人々も従事しています。図2は当時の新聞です。「飛行隊工事に従事の鮮人」という見出しがみえますが、この「鮮人」とは朝鮮出身者のことです。記事では、「三方ヶ原飛行隊工事の請負の大倉組では目下六百名の土工を使用して居るがそのうち内地人は四百名鮮人二百名」と書いてあります。多くの人々が動員され、飛行場が造成されたという歴史があるわけです。

#### ↑浜松からの爆撃隊

このような工事によってできた飛行部隊は、一九三一年の「満州」での戦争以降、中国各地で爆撃を行っています。図3は、一九三三年の熱河作戦の時に、飛行機から爆弾を



図1 西山 航空自衛隊浜松基地 弾薬庫

落としている写真です。写真には投下した爆弾も写っています。図4は、北京周辺の密雲を爆撃したときの写真です。小さな爆弾をたくさん落としています。このころから無差別爆撃をしています。これらの爆撃は、浜松から「満州」に派兵されていた飛行第十二大隊によるものです。

ゲルニカや重慶の無差別爆撃のことはよく知られていますが、いろいろな資料を見てみると、実は一九三〇年代の早いころから市街地の無差別爆撃をしています。

一九三七年に日中戦争



図2 『静岡新報』1926年10月29日



図3 熱河作戦での爆弾投下（飛行第一二大隊『満州事変記念写真帖』）

が始まりますが、この時にも浜松の部隊が中国に派兵されています。浜松からは重爆撃隊と軽爆撃隊が両方出て行きます。それらは現地で強化されて、飛行第六十戦隊、飛行第九八戦隊、飛行第三一戦隊などという名前になり、その後アジア各地に派兵され、爆撃をおこないます。

図5は防衛省図書館にある写真ですが、洛陽の市街を爆撃しているところです。図6はマレーシアのパナン島の港を爆撃している写真です。写真の欄外に「60F」



図4 北京・密雲への爆撃（飛行第一二大隊『満州事変記念写真帖』）



図5 洛陽への爆撃（『飛行第一二戦隊（重爆）中国要地爆撃写真集』）



と書いてありますが、これは「六十戦隊」という意味です。浜松から出て行った部隊が強化されて飛行第六十戦隊となり、アジア太平洋戦争にともないマレーシアの島を爆撃したというわけです。

つまり浜松の歴史をみると、浜松が空襲を受ける前に、浜松の基地から出撃してアジア各地を爆撃したことがわかります。これらの写真は、そのような歴史をしめす証拠です。

#### ↑浜松からの爆撃／浜松への爆撃

私は浜松の軍事の歴史を調べるなかで、浜松の空襲について記す前にアジアでの爆撃について調べたいと思いました。なぜかという、浜松に飛行部隊があり、その部隊が

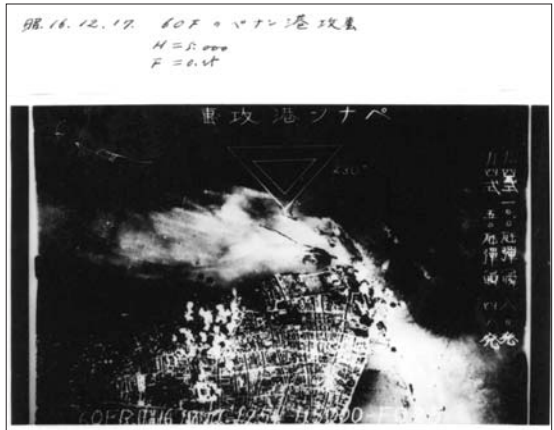


図6 パナン爆撃（『南西進攻60F参考写真集』）

中国を爆撃したということを聞いたことがあり、被害の前の加害の歴史に関心を持ったからです。しかし当時は、その飛行部隊が何をやったのか、まったく知りませんでした。そのような部隊があるのなら調べてみようと思って調べ始めました。

調べてみると、戦隊史がいくつか出版されていることがわかりました。有名な戦隊が、先ほどの飛行第六十戦隊ですが、この六十戦隊の戦隊史を古本屋で手に入れて読み始めたところ、予想以上にアジア各地を爆撃していることがわかりました。他の戦隊史をみると、マレーシア、シンガポール、さらにインドにまで爆撃に行っていることを知りました。

このような歴史を知る中で、浜松から出て行った部隊がアジアで何をしたのかということを知ることの重要性を再認識したわけです。

さて、そのうえで浜松の空襲についても調べてみました。調べてみると、いろいろな写真が



図7 艦砲射撃調査隊報告書

出てきました。

図7はそのうちの一枚です。これは、アメリカ海軍がイギリス海軍と一緒に艦砲射撃をした後の、艦砲射撃調査隊の報告書です。下に「HAMAMATSU」と書いてありますが、浜松の市街地が空襲と艦砲で攻撃されて破壊された後の写真です。図8も浜松市内の状況です。

## 浜松の戦争遺跡

### ↑浜松の戦争遺跡の分類

さて、ここからが本題の浜松の戦争遺跡についての話です。私は浜松の戦争遺跡を次の五つに分類しています。

#### ①陸軍航空基地関係



図8 浜松市内の破壊状況（艦砲射撃調査隊報告書）

#### ②浜松空襲関係

#### ③「本土決戦」関係

#### ④戦争死者追悼碑

#### ⑤強制労働跡地

このうち①と②が主要な遺跡調査の対象になります。⑤については、日本通運浜松支店や鈴木織機、天竜の久根鉾山や峰之沢鉾山に朝鮮半島から一〇〇〇人を超える朝鮮人が連行されています。峰之沢鉾山へは中国人も連行されました。また、学徒動員などでも多くの人々が軍需工場に動員されました。そのような跡地も調査の対象になります。

### ↑米軍史料から見る浜松空襲

最初に、アメリカ軍の史料から浜松空襲について見ていきたいと思っています。図9は、アメリカの戦略爆撃調査団の資料で、国立国会図書館に所蔵されています。爆撃目標に関する資料ですが、これを見ると、静岡県が中央で二つに分けられています。図の中の「90・21」という番号は浜松地区を示しています。この地区には豊橋も入っていますから、アメリカ軍にとっては、浜松も豊橋も同じ浜松エリアだったということが分かります。

図10には浜松を中心に円がいくつも描かれています、

この円の中心になっっているのは日本楽器のプロペラ工場です。市内にある日本楽器が主な攻撃目標だったのです。図11は、浜松の市街地を拡大した地図ですが、鈴木織機、国鉄工機部、中島飛行機などの工場や陸軍の飛行場も含まれています。軍需工場や軍事施設がアメリカ軍のターゲットであったわけですね。

図12・13・14は爆撃用の写真や地図です。図14は「リトモザイク」とい

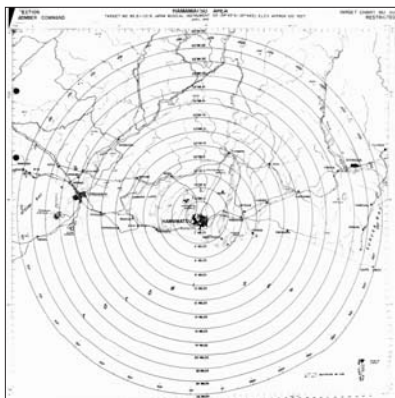


図10 攻撃目標地図

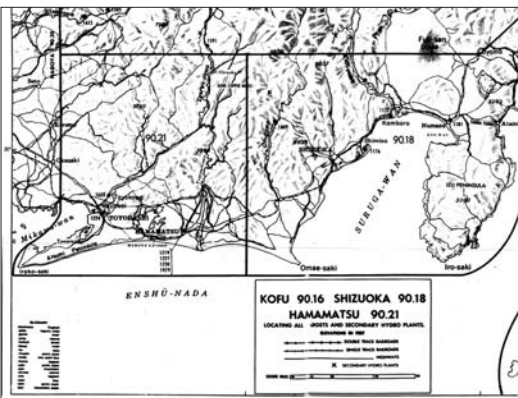


図9 目標情報 90は日本、21は浜松を示す



図12 浜松北部の写真

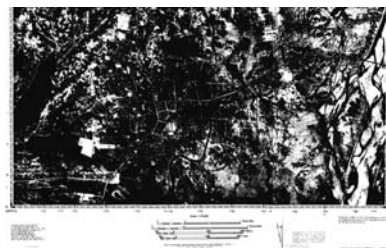


図13 浜松南部の写真

われる爆撃用の地図です。このような爆撃用の地図を作るために、偵察機で空から写真を撮ります。それを参考に地図を作り、パイロットに渡して、爆撃目標を指定し、実際に爆撃するわけです。

このような爆撃用地図を作るために、アメリカ軍は日本のいろいろな地図を集めて研究しています。図15もアメリカ

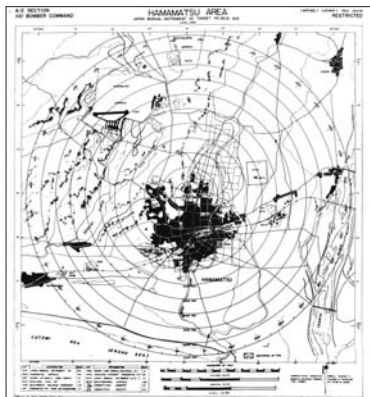


図11 攻撃目標地図



カ軍が集めた地図から作成されたものの一つで、浜名湖周辺の地図です。図16・17は浜松市内の地図ですが、英文で表記されています。

図18は、ターゲットの情報を書き込んだシートで、日本楽器でのプロペラ生産の詳細が記されています。「TARGET

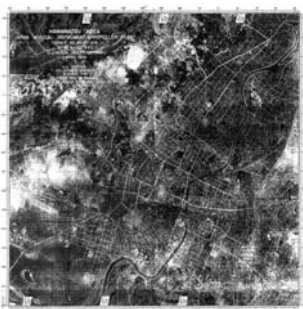


図14 浜松攻撃用のリトモザイク



図15 浜名湖周辺地図



図16 浜松市内地図



図17 浜松市内地図

1219」とありますから、このようなシートがたくさん作られていたわけです。図19は、「艦載機戦闘報告書」という資料の中にあるものです。空母から出撃した艦載機が浜松の飛行場をどのように爆撃したかを記した報告書に含まれている地図です。

図20～25は、艦載機による浜松基地とその周辺の航空写真です。特に図23からは、地上に飛行機を隠すための掩体が多く作られていることが分かります。図26は、損害評価報告（「DAMAGE ASSESSMENT REPORT」）の写真です。これは浜松の基地を爆撃してどのくらいのダメージを与えたのかということを調査し、報告したものです。



図18 ターゲットシート



図19 浜松・三方原の軍事基地攻撃地図（艦載機戦闘報告書）

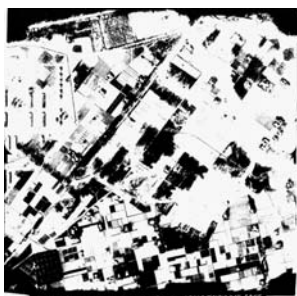


図22 艦載機航空写真



図21 艦載機航空写真



図20 艦載機航空写真

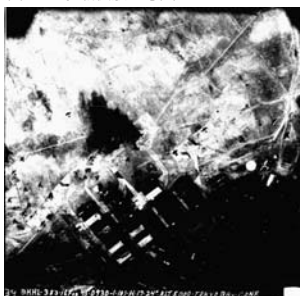


図25 艦載機航空写真



図24 艦載機航空写真



図23 艦載機航空写真

図30は中島飛行機の浜松工場です。図31は浅野重工業、図32は日本楽器天竜工場です。浜松の工業地帯ではプロペラとエンジンという二つの主要部品が作られ、飛行機関連の

図27は日本楽器の爆撃目標標票です。図28はその日本楽器を爆撃した時の写真で、爆撃による煙が写されています。図29の写真は浜松市内の空爆後の状況を示すものです。白くなっている部分が空爆され焼失した所です。繰り返される空襲によって、三五〇〇人を超える市民が命を失いました。

図27は日本楽器の爆撃目標標票です。図28はその日本楽器を爆撃した時の写真で、爆撃による煙が写されています。図29の写真は浜松市内の空爆後の状況を示すものです。白くなっている部分が空爆され焼失した所です。繰り返される空襲によって、三五〇〇人を超える市民が命を失いました。

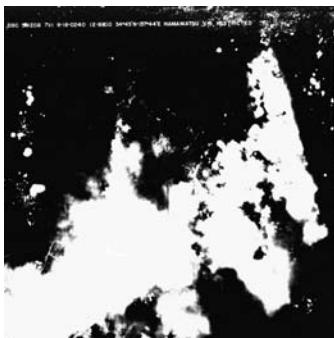


図28 日本楽器への爆撃写真



図27 日本楽器の爆撃目標



図26 浜松飛行場への攻撃・損害評価写真



図31 浅野重工業



図30 中島飛行機浜松工場



図29 空爆後の浜松市街



図34 新居海兵団・舞阪鉄橋



図33 和地倉庫



図32 日本楽器天竜工場

部品や工作機械などを製造していた工場も多く、そのために爆撃の目標になったわけです。さらに夜間の市街地への無差別爆撃や艦砲攻撃もおこなわれました。

図33は和地の地下壕の写真です。図34は新居・舞阪の付近ですが、新居には海兵団が置かれていました。図35は天竜の飛行場です。

図36・37は先ほど紹介した爆撃の損害評価の写真で、浜松市街地のものです。このような写真から、どれだけ被害を与えたのかを示す損害評価の地図が作成されました。その地図が図38です。ここでは、六・一八浜松空襲によって被害を与えたエリアを斜線で示しています。黒塗りのエリアは、六・一八の浜松空襲より前に破壊されていた区域で



図37 損害評価写真



図36 損害評価写真



図35 天竜飛行場



す。

ここで紹介してきた写真の多くは、アメリカの国立公文書館にある戦略爆撃調査団の資料を日本の国会図書館が収集したものです。また、戦略爆撃調査団の資料から浜松関係の資料を収集したものが、浜松市立中央図書館にあります。

次に、浜松の戦争遺跡の写真を紹介していきます。冒頭でもお話ししましたが、浜松の戦争遺跡を考えるとときには、浜松から飛び立った部隊がアジアで何をしたのかという加害の歴史を踏まえる必要があると考えています。そこで、浜松の話の前に、浜松から派兵された部隊が西安の市街を爆撃した写真を紹介しておきます（図39）。



図39 西安への爆撃（「飛行第一二戦隊中国要地爆撃写真帳」）



図38 浜松市街地の損害評価地図

## 写真でみる浜松の戦争遺跡

十浜松三方原の陸軍航空関係史料さて、浜松の戦争遺跡の事例に入ります。

図40は浜松基地に向かう道路沿いにあるトーチカです。トーチカとは、機関銃や砲などを備えたコンクリート製の堅固な小型防御陣地のことです。

三方原には、赤松鳥居という鳥居があります。この赤松鳥居は、戦争中に陸軍が「敵の目標になる」といって撤去してしまったのですが、西山の航空自衛隊に保管されていた浄水盤と道標を一九七八年に元のところに戻して復元しました。その由来を記した説明板の写真が図41です。

図42は、三方原教導飛行団



図41 赤松鳥居の説明板



図40 半田・トーチカ

跡にあった貯水槽の跡です。毒ガス部隊の痕跡だったので、最近消滅してしまいました。

図43は三方原教導飛行団の跡地にある門柱ですが、当時の門柱かどうかはよく分かりません。三方原教導飛行団の跡地には現在自衛隊の官舎があります。浜松工業高校の近くです。

図44も浜松工業高校の近くですが、三方原教導飛行団の南側に第七航空教育隊（中部第九七部隊）がありました。これは整備教育の部隊ですが、この部隊の敷地には排水路が掘られています。この排水路も戦争遺跡の一つとっていいと思います。

図45の碑も三方原にあります。これは「四勇士碑」といいます。一九三七年三月一日、四人乗りの九三重爆撃機が爆撃演習中にエンジン事故



図42 東三方・貯水槽跡（消滅）



図43 東三方・三方原教導飛行団跡

で墜落し、その事故で亡くなった部隊員を追悼した碑です。

住吉の青少年の家の前の公園には陸軍墓地がありました。図46は陸軍墓地の跡です。ここにあった「忠霊殿」という建物は近年破壊されました。忠霊殿は一九四三年に戦争死者の遺骨を一時安置する場所として陸軍省によって建設されました。これまで遺族会が借用する形で管理してきましたが、老朽化によって取り壊されました。

また、この中にあった一万人余りの位牌は二〇〇五年三月に処分を強いられました。墓地には「陸軍用地」の石柱が残っ



図44 初生・第7航空教育隊の排水溝



図45 三方原・「四勇士」の碑



図46 住吉・陸軍墓地跡



ています(図47)。図48も陸軍用地の石柱ですが、これは鹿谷にあった憲兵隊の跡地に残っているものです。

図49は浜松基地の中にある地下司令部跡です。図50は浜松工業高校の近くにある貯水関係の施設で「長池」と呼ばれています。

一九三九年ころに掘られました。軍事基地は保水ができたため、流出する水を貯める施設が必要になり、貯めた水を段子川に流すための水路が作られたわけです。この工事現場には朝鮮人の労働者も働いていたという証言があります。

#### ↑浜松の陸軍航空部隊と毒ガス戦

図51は、広島県の大久野島の毒ガス資料館に展示されている毒ガスの容器です。「きい剤容器」と書いてあります。「きい剤」とは、イペリットや、イペリットとルイサイトを混



図49 西山・浜松基地の地下施設



図48 鹿谷・憲兵隊跡地の石柱



図47 住吉・陸軍墓地の石柱

合したもので糜烂性の毒ガス兵器です。戦争が終わるとすぐに、浜松では隠蔽のためにこのような容器を浜名湖に捨てました。

この「きい剤」は中国大陸にたくさん運ばれ、実戦で使用されています。日本軍の資料では、空からばら撒くという「雨下」はしないとしていますから、

他は許可されているわけです。普通の爆弾を投下して、その中に混ぜて使用するというやり方ならいいというような考え方もあったといえます。その実態はよく分かりません。中国側の資料には、日本機がやって来て毒ガス弾を投下したという記事があります。

細菌も兵器としても使用されました。細菌が実際に使われたという中国側の証言をもとに調査したところ、実際に使用していたことが分かり、被害者が日本政府に



図51 大久野島(広島県)の毒ガス容器



図50 初生・長池

対して損害賠償を求める裁判を起こしたのが一九九〇年代半ばです。参謀の資料の中に細菌兵器の使用の記述があり、現地調査で被害者側の証言が一致し、その使用や被害の状況が分かり、その被害を認定させ賠償させようという動きになったわけです。それは、戦争が終わって五〇年がたった段階のことです。戦争犯罪である毒ガス戦や細菌戦に関する戦後補償の問題はまだ終わってはいないのです。

では、陸軍の毒ガスがどこで製造されたのかというと、広島県の大久野島です。毒ガスを缶に入れ、列車に乗せて各地に運んでいくわけです。この「きい剤」が浜松にあったことは事実です。もともと飛行学校には毒ガス関連の部隊が置かれていました。三方原教導飛行団はそれが分離独立したものであり、本土決戦時に毒ガスを使う実戦部隊であつたわけです。毒ガスを使つての訓練もおこなわれていました。浜松陸軍飛行学校は「満州」でも毒ガス使用の訓練をおこなっています。

戦後、毒ガスは浜名湖に捨てられたのですが、その後、遠州灘に再投棄されました。中国に運ばれた毒ガスの多くは現地に残されたままです。チチハルなどでの戦後の毒ガスによる被害も遺棄毒ガスによるものです。

#### ↑ 浜松からの爆撃

図52は浜松の陸軍飛行学校時の建物を利用した浜松基地の資料館です。この資料館には、シンガポール爆撃の時に佐藤重由中尉が使用した地図が展示されていました。佐藤重由という人は、飛行第六十戦隊の中隊長です。私はそれを見て、アジア侵略の視点で

浜松の歴史をもう一度捉え直さなければならぬと思います。地域の歴史を調べ直して、浜松から出て行った部隊がアジアで何をやったのかということを調べ、そのうえで浜松の空襲の歴史を調べたいという思いを強くしたのです。

図53は、飛行第七連隊の門柱を利用した碑です。



図52 浜松基地の資料館



図53 陸軍爆撃隊発祥之地



図54 碑文

門柱に「陸軍爆撃隊発祥之地」と刻んであります。この碑は浜松基地の資料館の前にあります。横には歴史を記した碑があり、その一部が図54ですが、ここには浜松からの部隊がアジア各地を爆撃したことが記されています。

さらに注目すべきは「戦略爆撃」を「敢行」と、はっきりと書いていることです。戦略爆撃とは、後方の主要軍事施設や生産施設、物資貯蔵所、交通網や住民を爆撃することにより、相手の戦意を低下させて降伏させようとする攻撃です。重慶や蘭州などへの戦略爆撃が行われていますが、この碑を建てた一九六〇年代の段階で、当時の日本の陸軍がやった行為が肯定的に語られているという点を見逃してはいけません。

歴史を見ていくときには、爆撃の下にいた人々がどのような気持ちだったのかという視点でとらえることが必要だと思います。先ほど見た米軍の爆撃の評価用の写真でも、その下にいた市民がいったいどのような状況になったのかという視点が大切です。米軍の「戦果」の数値を見るために、私たちは歴史を学んでいるわけではないのです。落とされた側の気持ちはどうなのか、爆撃されるなかでアジアの人々がどのような思いでいたのか大切です。そのような思いを踏まえながら、浜松の空襲を見つめ直すという作業が必要だと私は考えています。

基地資料館の展示にある浜松から出撃した特攻隊員の遺書には、「大君の御楯」となって、「尽忠報国」し、「必勝の信念」を持つという気持ちが記



図55 沖縄戦特攻・義烈空挺隊（『飛行第60戦隊史』）

されています。人間をこのように命を否定する存在へと追い込んでいった歴史のありようを問うべきです。同様に多くの人々が死を強いられたと思います。二二〇万人の兵士、一〇〇万人といわれる市民、あわせて三一〇万人という日本人が、なぜそのような死を強いられたのか、これから死を強いられない環境をどのように構築していけるのか、攻撃を受けた側のアジアの人々はどういう状況になったのか、平和と友好には何が必要なのかという問いは、平和への出発点であると思います。

#### 十 浜松駅周辺の戦争遺跡

図56は、浜松城公園にある「帰国記念植樹」碑で、一九五九年に建てられました。浜松城天守閣のすぐ横にあります。「朝日両国永久親善万歳 朝鮮民主主義人民共和国帰国記念植樹 在浜松朝鮮公民一同」と記されています。三方原での陸軍飛行場建設の頃には多くの朝鮮人が来

ていました。戦時期には強制労働をさせられた人もいたのですが、多くは仕事を求めて浜松にきた人々でした。一九五〇年代の中頃から帰国事業が始まります。一九四八年に南北が分断されて、一九五〇年に朝鮮戦争になり、一九五三年に朝鮮戦争が停戦しますから、この碑は停戦から数年後に建てられたことになります。

朝鮮認識は近年「拉致」問題によりだいぶ歪んでしまいましたが、朝鮮半島は日本の隣国ですし、朝鮮から漢字や仏教が伝わります。同じ文化圏に属する地域ですから、本来は友好的な関係になるべきです。立場が違い、国が違い、民族が違って、ともに仲良くしていくにはどうすればいいのかということが今後の課題だと思えます。この碑には帰国に際して、親善友好を求めた人々の思いがあると思います。

図57 浜松城公園に



図57 松城・浜松空襲死者追悼碑



図56 松城・帰国記念植樹の碑

ある浜松空襲死者の追悼碑です。この碑のうしろには戦災死者三五四九人と人数が刻んであります。実際の死者数はより多いものになるでしょう。人々がお金を出し合って、浜松城公園の一角に碑を建て、平和と追悼への思いを刻んだことは、歴史的な意義があります。

図58は静岡銀行の建物です。この建物は戦争中に焼け残りました。復旧して現在も使われています。市内にある戦争遺跡のひとつです。

図59は、馬込川の揚子橋に残っている被弾の痕跡です。おそらく機銃射撃による弾痕と考えられます。

図60は河合楽器にある追悼の慰霊塔です。河合楽器でもたくさんの方が亡くなりました。碑には死者の名前がなく、だれが亡くなったかを碑からは知ることができません。



図58 田町・静岡銀行浜松支店



図59 楊子橋の被弾の痕跡



浜松市内には空

襲関係の戦争遺跡が各所に残っています。今回の講座では、地域と戦争の実態について、植松の円通寺の被災した門、円通寺の航空兵の墓碑、植松の公園の戦争死亡者の碑と本誠寺の位牌、新町の被爆地蔵などを紹介しながら、解説する予定です。



図60 寺島・河合楽器追悼碑

#### 十浜名湖周辺の戦争遺跡

図61は、浜名湖近くにある左浜の信丘寺の墓碑です。碑文には、「昭和十四年初重慶蘭州等ノ爆撃」と刻まれています。飛行第十二戦隊は一九三九年二月に蘭州を爆撃しますが、その際に三機が撃墜され、部隊員が命を失っています。この碑の人物もその

ときに亡くなりました。

た。この墓碑は浜松を起点とする陸軍部隊による中国での爆撃を示すものです。

図62は浜名湖の



図61 左浜・信丘寺の航空兵の墓碑

鉄橋ですが、ここはアメリカ軍による空爆の対象になりました。この鉄橋を守るために、高射砲部隊が配置されました。数年前、私はここに配属されていた朝鮮人の兵士の方から話を聞きました。その人は今、日本の政府に対して謝罪と賠償を求める韓国人軍人軍属裁判に参加しています。

図63は新居の海兵団に残っている避難壕です。新居の海兵団は艦砲射撃の際にたくさんの方士が亡くなりました。死者の名前は公園にある碑に刻まれています。この壕は新居の海兵団の歴史を語るものです。



図63 新居の避難壕



図62 浜名湖鉄橋

#### 十浜松市北区・天竜区の戦争遺跡

図64は、引佐の渋川にある凱旋門です。日露戦争後の一九〇六年に建てられました。この門は建てられてから百年近くになりますが、建設時の面影を残しています。



図65は、龍山の峰之沢鉱山にある中国人死者を追悼する碑の前での追悼会の写真です。中国から二〇〇人ほ

どが連れて来られて、八一人が亡くなりました。連行される段階でかなり衰弱していて、鉱山に来て強制労働の下で、たくさん亡くなっています。朝鮮半島からも五〇〇人ほど連行されています。

図66は陸軍中野学校二俣分校

校の碑です。ここはゲリラ戦要員の短期育成を目的とした教育機関であり、命を惜しまずに、上官の命令があ



図64 引佐・渋川・凱旋門



図65 龍山・峰之沢鉱山の中国人追悼碑



図66 二俣・陸軍中野学校二俣分校の碑

るまでゲリラ戦をやり抜けと教えていました。小野田寛郎さんもここで教育されました。かれはここでの教えを守り、戦争終了後もゲリラ戦を継続し続けたのです。最近、この部隊の部隊史を手に入れて読んだのですが、一人、名前が消されたままの人がいました。沖繩の久米島は島民や朝鮮人が軍によって虐殺される事件が起きた島ですが、その人は久米島に身分を隠し学校の先生として派遣され、秘密裡に課報活動をしていました。

### 十地下壕

軍事基地があり、空襲も激しくなりましたから、浜松には多くの地下壕が掘られました。その地下壕の多くは消滅しましたが、残っているものもあります。残っている壕は、市民が隠れた壕もあり、兵士が隠れた壕もあります。図67は、おそらく兵士が隠れた壕だと思います。浜松基地の南方にありました。図68は、高台公民館の近くにある地



図67 和合・浜松基地南方の壕



図68 和合・高台公民館近くの軍地下壕

下壕です。この壕の周辺は塹壕のような形になっています。図69は細江と浜松の間にある根本山の中に残されている壕です。大きな壕であり、山頂からの堅坑と山の横からの壕がつながる構造です。

#### 十「和解」に向けて

図70は、新居にあるアメリカ兵を追悼する碑です。新居の空襲時に米軍機が撃墜されました。この碑の下方には一九四五年七月に墜落して亡くなったアメリカ兵の名前を刻んでいます。神宮寺の住職さんが、アメリカ兵も人間だと言って、戦後に建てたのです。このような碑を作った精神が共有され、「敵」とされた者同士がどのようにに共同する関係をつくっていきけるのかは、平和への出発点だと思っています。

最近、「和解」



図70 新居・米兵追悼碑



図69 根本山・軍地下壕

という言葉がよく語られます。その前提としては加害行為への謝罪が必要です。加害を見つめ、それから被害を見つめる。戦争の原因をとらえ、戦争への抵抗についてもみながら、命の大切さ、人間の尊厳への視点を基礎に、どのようにに和解と共同をすすめていくのかを考えなければならぬと思います。この碑は、地域における友好と和解のはじまりになる視点を持つ碑ではないか思います。

#### 世界各地の戦争遺跡

最後に、世界各地の戦争遺跡を見てみたいと思います。図71は、フィリピンのマニラ市街にある、マニラ戦の死者を追悼する碑です。一九四五年二月から三月にかけてマニラ戦があり、一〇万人ほどが亡くなっています。アジア太平洋戦争での悲惨な例として、戦後五〇年たってできた碑です。

図72はベトナムの、日本軍支配下でおきた飢餓で亡くなったベトナム人を追悼する碑です。ベトナムでは二〇〇万人の死と言っていま



図71 マニラ戦追悼碑

す。

図73はフィンランドの碑です。フィンランドでは、一九一八年に内戦が起こり、市民同士が殺し合いました。日本では、靖国神社問題のように一九四五年に終結した戦争の評価がいろいろな形で話題になります。

ですが、フィンランドでは一九一八年の内戦問題が議論になるのです。市民同士が対立し、殺し合ったという内戦の歴史は、解決しにくい問題なのだと思います。

図74は、ドイツのベルゲンベルゼンにある強制収容所跡の写真です。ここには五〇〇〇人が埋まっていると記されています。ブルドーザーで死体を集めて埋める映像が残っています。ユダヤ人だけで六〇〇万人が亡



図73 フィンランド内戦追悼碑



図72 ベトナムの餓死者の追悼碑



図74 ドイツ・ベルゲンベルゼン収容所跡

くなったといえますし、ドイツ人も五〇〇万人以上が亡くなっています。二回の世界戦争による世界の死者数は一億人近いといえます。

図75は、ポーランドにあるクラクフに残っているユダヤ人の墓です。ドイツ軍はユダヤ人の居住地を破壊し、お墓も破壊しました。そして墓石を道路に敷き詰めたのです。戦後、人々は敷き詰められた墓石を集めて、壁に塗り込めたのです。このような形で歴史を継承しています。

図76はドイツのベルリンにある「つまずきの石」という作品ですが、連行された人の名前とどこで死んだのかが書いてあります。これは路上にあります。踏めば踏むほど、輝くようになっていくのです。このように戦争死者の碑を身近な所に置いて、その歴史を忘れないようにしましょうしています。このような作品からはドイツの歴史の継承への思いが感じられます。



図75 ポーランド・クラクフのユダヤ人墓石



図76 ドイツ・ベルリンの「つまずきの石」

図77は、中国にある七三一部隊の資料館の建物内部のプレートです。ここには、漢民族で二一歳だった蔡さんが一九三八年二月四日に警備隊に捕えられ、一九三九年四月二〇日に特別輸送されたと書いてあります。実験材料として部隊に連れて行かれて、解剖されて殺されたのか、あるいはベスト菌を植えつけられて殺されたのかは分かりません。いずれにしても「特別輸送」によって闇に消されてしまったわけです。その名簿のいくつかが近年発見されていますが、憲兵隊の資料に「特移扱」と書いてあるのです。それは、細菌兵器開発のための実験材料として七三一部隊に送ったということなのです。このようにプレートができ、名前が刻まれたのは、戦後五十年たつてからのことです。遺族調査もはじまっています。

図78は中米コスタリカにある軍事施設の跡です。コスタリカは内戦ののち、軍隊を廃止しました。アメリカ寄りの国ですが、中米で独自外交を進め、中米での内戦の終結に努めました。この軍事施設は現在、国立博物館になっています。人を殺すことにつながるものを平和なものに変えて

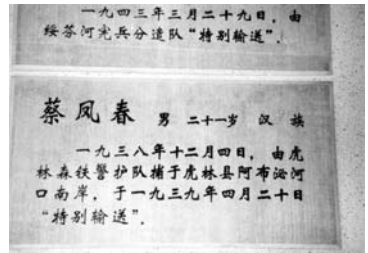


図77 中国・ハルビンの731部隊資料館のプレート

いく人々の歩みは、これからも進んでいくのではないかと思います。

ヨーロッパ連合の形成は平和的統合のはじまりだと思えます。アジアでの平和的な共同もとめられます。この間、アメリカがすすめたグローバルな戦争もおそらく見直されるでしょう。食料や原油を高騰させて投機マネーで儲けていく、規制緩和や民営化によって公共財をも競争の中に入れていく、その結果、地域が空洞化し、貧困が広がるというような経済スタイルも見直されていくでしょう。人々が本当に幸福になるような関係をどうやって作っていけるかが、今後の課題になると思います。

### 戦争遺跡の意義

今回は浜松や世界の戦争遺跡を見ながら、戦争遺跡から何を学ぶことができるのかについて話してきました。最後に強調しておきたいことは、加害の歴史を踏まえながら、被害の歴史や民衆ひとりひとりの死の重さを見つめるとい



図78 コスタリカ国立博物館

うこと、戦争賛美の言葉の裏にある人々の死や悲しみや怒りを読み込んでいくことです。やはり読みとつていく側が想像力を高めながら、どのようにしたらいい歴史を作っていただけるのかという視点をもつことが大事だと思います。

終わりに、戦争遺跡を考えることの意義を三点にまとめてみます。

一つは、生命や人間の尊厳について考えることであると思います。そこには亡くなった人がいますし、あるいは殺す側に回った人もいます。戦争遺跡は生命への視点を示し、人間の方向性を問うものであると思います。

二つめは、歴史認識や歴史的責任を考えるということです。戦争遺跡は、その戦争の原因や責任を考え、どのように過去を清算してよい社会を作っていくのかという歴史的な責任を問いかけるものと思います。

そして三つめに、それらを踏まえながら、どのように非軍事の平和な社会、アジアの友好や共同性を作っていくのかというテーマを提示するものと考えます。

## 参考文献

価報告、空襲目標フォルダー、艦載機戦闘報告書ほか（国立国会図書館蔵）

飛行第一二大隊『満州事変記念写真帖』一九三三年

『飛行第六十戦隊小史』飛行第六十戦隊会、一九八〇年

『飛行第一二戦隊（重爆）中国要地爆撃写真集』（防衛省防衛研究所図書館蔵）

『飛行第一二戦隊中国要地爆撃写真帳』（防衛省防衛研究所図書館蔵）

『南西進攻60F参考写真集』（防衛省防衛研究所図書館蔵）

十菱駿武・菊池実編『しらべる戦争遺跡の事典』柏書房、

二〇〇二年

『浜松の戦争史跡』人権平和・浜松、二〇〇五年

『浜松・磐田空襲の歴史と死亡者名簿』人権平和・浜松、

二〇〇七年

『米国戦略爆撃調査団報告書』艦砲調査隊報告、空襲損害評